

◆冬から春にかけての今号は、やはり冬の作品が多い。正月に関するものもある。季節は確実に移ろい、山形も春になった。とはいうものの、中東での武力行為がひどくて停戦の合意もなされないままである。ガザの悲惨さが霞んで見えるほどだ。満開の桜を目にしても気分は晴れない。

◆三月半ばに集まりがあつて、二年ぶりに東京へ行った。東京駅に降り立った途端、目にしたのは大勢の外国人の姿だった。ただでさえ混雑する東京駅で、外国人が大きい荷物をゴロゴロ引きながら歩いている。もちろん日本人もゴロゴロと引いていて、家族であれば離れてはならじと子どもを叱りながら必死に向かつて進んでいる。駅構内の様子に圧倒され、あらかじめ決めていた店での昼食を諦めて目の前の店に入ることにした。昼にしては早い時間だったので、空いていてゆっくり食べることができた。

目的地は表参道。地下鉄（東京メトロ）で行けばよいと思つたが、地下鉄路線図は頭からすっかり抜けている。路線案内を見た。時間はたっぷりある。丸ノ内線に乗り、途中で銀座線に乗り換えればいいのだなと思つていたところ、「銀座線乗り換え」のアナウンスに瞬間的に降りてしまった。そこは銀座駅だった。あれーっ、なんか違う。遠い昔にこの路線で通勤していたばかりに、

知っているつもりがよくなかつた。赤坂見附のほうと同じホームでの乗り換えになるので都合がいいのだ。また丸ノ内線に乗り、赤坂見附で銀座線に乗り換えた。久しぶりの銀座線の車両は黄色に塗り替えられていた。ホツとして吊革につかまっていたら、エクスキューズミーと声をかけられた。わたしに席を譲ろうというのである。見るからに高齢者であろう、リュックも背負っている。ありがとうと座らせてもらった。表参道では出口をしっかりと確認して、無事に会場へ着いたのだ。ことほど左様に、東京は便利といえれば便利だが、煩雑な街である。

また、山形へ帰るときのこと。東京駅のホームから見える光景は、どんどん高層ビルを建てている様子ばかり。まるで壁である。エキナカで目当ての弁当を買い、車窓を眺めながら食べようと楽しみにしていたのだけれど、期待したほどの味ではなかつた。わたしはもう既にこの街を構成する住人の一人ではない、そう思いながら東京を後にした。

（布宮慈子）

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊「展景」
121号

二〇二六年四月三十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地蔵

info@muninokai.com

Copyright © 2026 MUNINOKAI. All rights reserved.